

ミャンマーにおける日本語フリーペーパー

菊池 泰平

ミャンマーにおける日本語フリーペーパーリスト

媒体名	出版年	出版者	出版地	判型	刊行頻度	ウェブ
ミンガライフ／MINGALIFE	2012 年創刊、 2014 年 10 月廃刊	ミンガライフ 編集局	—	—	年 3 回	—
I LOVE YANGON	2013 年 4 月創刊	株式会社グラウ ディングラボ	日本（東京）	—	—	http://www.iloveyangon.info/backnumber.html
Hello!! YanGon／ハローヤンゴン	2013 年春	クラウンライン	ベトナム （ホーチミン市）	天地 26cm	—	https://incn.crownline.jp/media/helloyangon/
Yangon Press／ヤンゴンプレス	2013 年 5 月創刊、 2021 年 5 月休刊	Yangon Press Asia Co. Ltd.	ヤンゴン	天地 39cm	創刊時は隔月、 後に月刊	—
MYANMAR JAPON／ミャンマー・ジャポン	2013 年 6 月創刊	Myanmar Japon Co., Ltd	ヤンゴン	天地 30cm	月刊	https://myanmarjapon.com/
KANARAY／カナリー	2014 年 1 月創刊	—	—	天地 26cm	隔月刊	—
ミャンガイ	2014 年 6 月創刊	Sagittarius Myanmar	ヤンゴン	天地 19cm	月刊	—
「Myan Myan」GUIDEBOOK	2015 年 2 月創刊	Maeken Myanmar	ヤンゴン	天地 30cm	月刊	—
ミャンジャポ！	2017 年 3 月、2018 年 11 月をもって廃刊となり、 『MJ ビジネス（現ミャン マー・ジャポン）』に吸収 合併された。	Myanmar Japon Co., Ltd	ヤンゴン	B4 変形	月刊	https://myanmarjapon.com/myanjapo

ミャンマー最大都市ヤンゴンでは、近年、日系オフィスのロビーやホテルで日本語フリーペーパーを見かける機会が増えた。この動向は、ミャンマーにおける日本人コミュニティの拡大と相関関係にある。ここでは、2011 年の民政移管後に発行された日本語フリーペーパーを俯瞰してみたい。

2008 年に制定された憲法のもとで、2011 年にテイン・セイン大統領（当時）が就任し、民政移管が果たされた。大きな体制変革はないだろうという人々の予想に反して、テイン・セイン政権下では大幅な体制改革が行われ、政府主導による民主化、国民和解のプロセスが始まった。こうした背景のもと、日本でも「アジア最後のフロンティア」と呼ばれたミャンマーには、日系企業が急速に進出した。

在留邦人数の推移は、その変化を最も顕著に示している。2010 年 10 月 1 日時点の在留邦人数は 516 人であった。その後、2013 年ごろから伸び始め、2020 年

10 月 1 日時点には 3,369 人まで増加した（下グラフ）¹。

ミャンマー在留邦人数の推移（2010-2022）



長期滞在者や、観光や出張目的の短期滞在者を読者層として、2013 年ごろからフリーペーパーの刊行が相次いだ。管見の限り、2011 年以降で最初に発行された日本語フリーペーパーは、2012 年創刊の『ミンガライフ／MINGALIFE』である。発行者はミンガライフ編集局で、年 3 回刊行されたが、

¹ 外務省『海外在留邦人数調査統計』平成 22 年（2010 年）10 月 1 日現在～令和 4 年（2022 年）10 月 1 日現在 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html>（2023 年 3 月 31 日最終アクセス）

第8号（2014年10月）をもって廃刊となった。

しかし、より多くの日本語フリーペーパーが発行されたのは2013年であった。この年、『I LOVE YANGON』、『Hello!! YanGon／ハローヤンゴン』、『Yangon Press／ヤンゴンプレス』、『MYANMAR JAPON／ミャンマー・ジャポン』の4誌が創刊された。4月に創刊された『I LOVE YANGON』は、出版地は東京であるものの、現地で配布された。最大都市ヤンゴンに関する情報を中心に、ビザの取得方法や、渡航上の注意、地図、滞在先のホテル・レジャー・医療機関に関する情報を掲載した。発行者はエンターテインメントプロデューズを取り扱う株式会社グラウディングラボ²である。

『Hello!! YanGon／ハローヤンゴン』も、同年春に創刊された（出版地ホーチミン、天地26cm、冊子体）。こちらも出版地はベトナムのホーチミン市となっているが、ヤンゴン市内主要レストラン、ホテルなどで配布された。内容は、ホットトピック、ナウな会社、ヤンゴンMap、レストラン情報、突撃!! ローカルグルメ、ヤンゴンの住宅事情、ヤンゴンの不動産物件、ミャンマー医療相談室、ミャンマーの通信事情、ショッピングスポット、ミャンマー観光情報（バガン遺跡）、スポーツ情報（ミャンマーゴルフクラブ）、ミャンマー体験記（銀行口座を開設）、クラシファイドである（創刊号の目次より）³。発行者は、クラウンラインという海外引越し業者であり、ハローシリーズとしてタイ版、マレーシア版、シンガポール版などの出版・販売も行っている。

5月には、『Yangon Press／ヤンゴンプレス』が創刊された（出版地ヤンゴン、天地39cm、冊子体）。もともと隔月で発行されたが、のちに月刊になった。誌面の内容は、ミャンマーの飲食店や不動産情報、一般ニュース、観光に関するもので、ヤンゴン市内のホテルや空港、マンダレーやバガンといった日本人観光客が多く訪れる場所で配布された。編集・発行者はYangon Press Asia Co. Ltd. で、創刊者は日本での執筆活動を経て2011年にヤンゴンを訪れた栗原富雄氏（Yangonn Press 現編集長兼 CEO）で

ある⁴。2014年11月にはミャンマー語版の発行も開始している。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行と政変の影響を受けて、2021年5月より休刊中である⁵。

6月には、『Myanmar Japon／ミャンマー・ジャポン』が創刊された（出版地ヤンゴン、天地30cm、冊子体、創刊号の発行部数は10,000部）。ヤンゴン市内の飲食店、ホテル、日系企業オフィス、ヤンゴン国際空港、日本貿易振興機構（ジェトロ）、日本国内のミャンマー関連機関など100か所以上で配布されている。内容は、ビジネスニュースダイジェスト、特集用心！ミャンマー暮らし、TOP対談「ミャンマーの先輩に問う！」、使える！ミャンジャポ特製MAP（ヤンゴン地域、ダウタウン周辺）、Myanmar news scrap、今月の不動産情報、Pick Up! 「日本料理」、ミャンジャポクラシファイド ヤンゴン日本人学校便り、厳選お役立ちページ LISTING である（創刊号目次より）。発行者は、Myanmar Japon Co., Ltd である。もともとは『Myanmar Japon』というタイトルで発行されたが、『Myanmar Japon Business』、『MJ ビジネス』というタイトルに変更され、2021年12月の102号から元の名称に戻った。現在も発行中で、最新記事はウェブサイトにて無料公開されている⁶。

2014年には、『KANARAY／カナリー』と『ミヤンガイ』の2誌が創刊されている。『KANARAY／カナリー』は、1月に創刊された（出版地不明、天地26cm、冊子体、隔月発行）。ヤンゴン市内のホテル、レストラン、飲食店や公共機関等、日本国内、バンコクに設置された。日本語をベースにしながらも、日本語記事の英訳や、英語のオリジナル記事も掲載している。内容は、経済ニュース、ヤンゴンの地図、現地社会の文化紹介、スポーツ（ミャンマーのスポーツ事情、ヤンゴンのゴルフ場）、料理、ミャンマーの占い、美容、シャン州の食文化、ミャンマー女性の紹介「マドンナを探せ!」、ミャンマーのバス情報、ミャンマーレストラン、かんたん！ミヤン

2 同社ウェブサイトで過去のバックナンバーが読むことができるが、第5号（2015年3月）以降は更新されていない。<http://www.iloveyangon.info/backnumber.html>（2023年3月31日最終アクセス）

3 ハローヤンゴン（クラウンライン）ウェブサイト <https://incn.crowline.jp/media/helloyangon/>（2023年3月31日最終アクセス）

4 同誌が2016年10月までに掲載した巻頭エッセイと、各界の女性対談シリーズについては、編集長兼 CEO の栗原氏が記した以下の資料で確認できる。

栗原富雄. 2016.『ミャンマー——〔Yangon Press〕で読み取る現実と真実』東京：人間の科学新社。

5 READYFOR「ミャンマー発の日系情報誌「Yangon Press」への支援基金」<https://readyfor.jp/projects/67453>（2023年3月31日最終アクセス）

6 <https://myanmarjapon.com/>（2023年3月31日最終アクセス）
Myanmar Japon Co., Ltd は、2014年9日にミャンマー人富裕層向けの英語フリーペーパーとして、『Myanmar Japon +Plus』を、2017年10月に『MJ ビジネス パンコク版』を発行している。

マー語教室、SOS Information、読者限定クーポン等である(創刊号の目次より)。『KANARAY／カナリー』は、北インド・南インドエリアで発行している月刊誌『Chalo』の姉妹誌である。

また、6月には『ミャンガイ』も創刊された(出版地ヤンゴン、天地19cm、冊子体、2014年11月号の発行部数は3,500部)。掲載内容は、バスで行くゴールデンロック、水中パゴダへの旅、話題のニュータウンSTAR CITYなどである(2014年11月号の特集より)。著作編集は、ヤンゴンで江戸鮎／EDO ZUSHIを運営するSagittarius Myanmarで、ヤンゴン市内のレストラン、ホテル、企業で配布された。しかし、次に紹介する『「Myan Myan」GUIDEBOOK』に吸収された。

2015年2月に創刊されたのが、月刊誌『「Myan Myan」GUIDEBOOK』である(出版地ヤンゴン、天地30cm、第2号の発行部数は5,000部)。発行者はMaeken Myanmarで、日本語版とミャンマー語版が発行されている。配布場所は、ホテル、飲食店、空港などであった。掲載内容は、ニュース(We Are Open — ニューオープンのお店情報)、食事(HOT! SHOP NEWS — 藤の坊Fujinobo ヤンゴンの食リスト、ミャンマー料理店、日本料理店)、生活(ヤンゴン本当にあった かわいはない、ヤンゴン留學生日記、Umeのどんどこどん日記)、トラベル(ヤンゴン主要エリアガイド、あごピンよろず日誌、全20ページ! ヤンゴンお役立ちマップ)などである(第2号の目次より)。現在も発行継続中なのか不明だが、2つあるFacebookのアカウントはどちらも更新を停止している。

最後に、2017年3月に創刊された月刊誌が『ミャンジャポ!』である(変形B4、冊子体、創刊号の発行部数は8,000部)。発行者は『Myanmar Japon／ミャンマー・ジャポン』と同じMyanmar Japon Co., Ltdであり、ヤンゴン国際空港、在ミャンマー日本大使館、ジェトロ、JICA、日本在住のコンドミニアム、サービスアパートメント、有名ホテル、人気レストランなどで配布された。内容は、The premium hotel パークロイヤル ヤンゴン、Yangon gourmet report Yhet's Sushi & Soba、シートウー&ティンザーの使える! ミャンマー語教室、エンタメニュース!、“すわじゅん”の歌い手奮闘 おいしいローカルレストラン ミャンマー“カウンダー”フード、ミャンジャポ特製

MAP(ヤンゴン全域、シュエダゴン・パゴダ〜インヤー湖南、ヤンゴン ダウンタウン、ティワラ周辺)、用途別ヤンゴンレストランリスト、パーゴルフ、速水先生健康ミャンマー料理レシピ、大雄会伊藤先生が丁寧に解説! ミャンマー医療事情Q & A、クラシファイド、厳選お役立ちページLISTINGなどである(創刊号目次より)。2018年11月発行の第11号をもって廃刊となり、『MJビジネス(現ミャンマー・ジャポン)』に吸収合併された。

このように、民政移管から少し経った2013年以降、日本語フリーペーパーの創刊が目立った。明らかに、これは読者となる在留邦人の増加に伴うものであるが、2015年頃にはフリーペーパーの「創刊バブル」は落ち着き、その後は発行停止や休刊が相次いだ。本稿の執筆時点(2023年3月末)で、継続的な発行を確認できるものは、『MYANMAR JAPON／ミャンマー・ジャポン』のみである。加えて、2020年3月下旬からミャンマーでも流行が始まった新型コロナウイルス感染症と、2021年2月1日に起こった政変の影響を受けて、在留邦人数は減少に転じ、2022年10月1日時点で2,388人まで落ち込んだ。日本人コミュニティ全体が縮小し、読者数が減ったことを踏まえると、フリーペーパーの新刊や復刊が起こるには、いましばらく時間がかかりそうである。